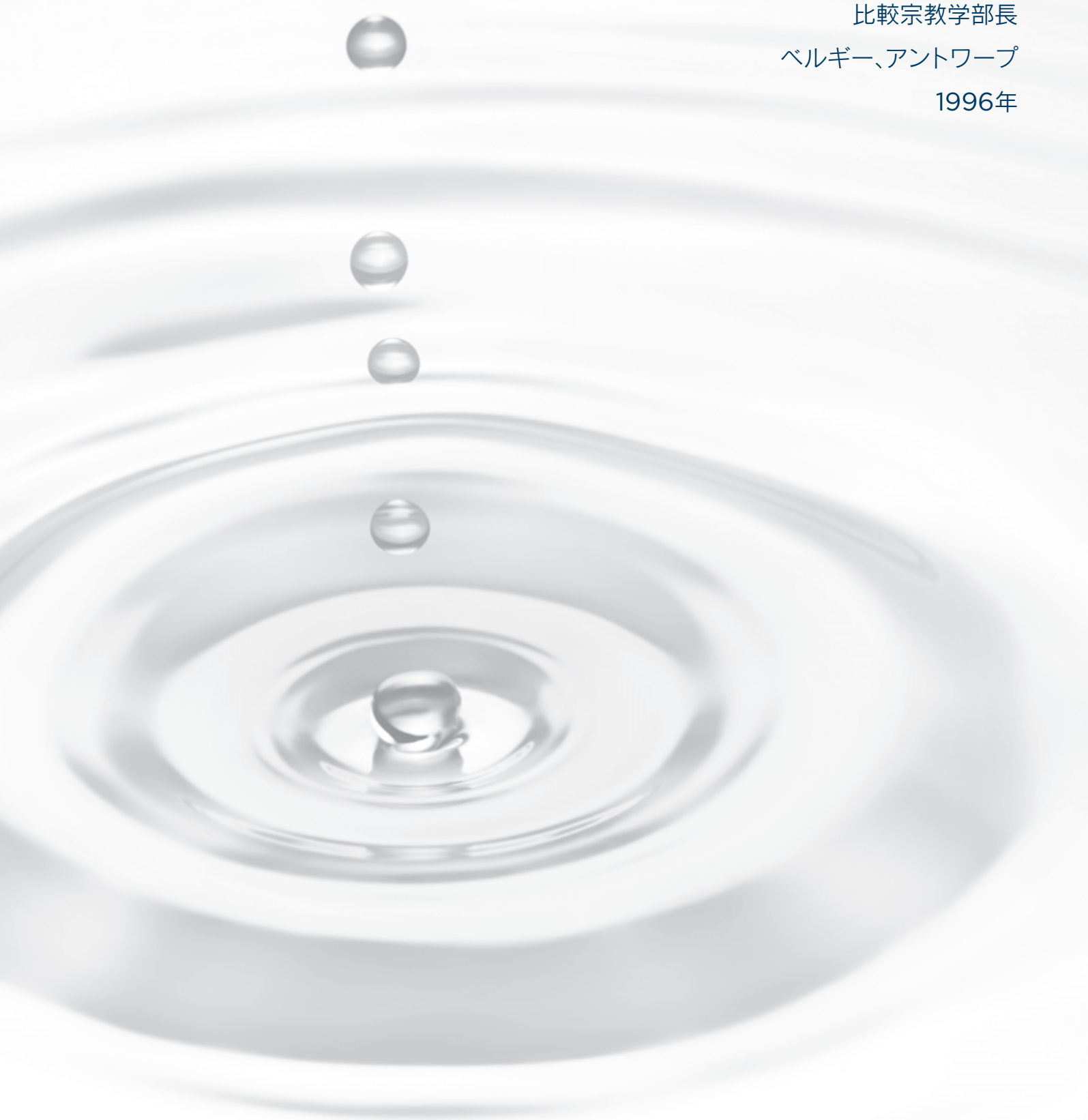
サイエントロジーと宗教

クリスティアン・フォンク博士
比較宗教学部長

ベルギー、アントワープ

1996年



サイエントロジーと宗教

目次

I.　はじめに	1
II.　サイエントロジーの観察	2
III.　教義	3
IV.　結論	6
注釈	7
著者について	9

サイエントロジーと宗教

クリスティアン・フォンク博士
比較宗教学部長

ベルギー、アントワープ

1996年

I. はじめに

宗教の定義とは何か？ 承認された (必ずしも政治機構が宗教を承認するわけではないが)、伝統的で確立された宗教でさえ、しばしば自らの起源を疑問視し、それらが本当に唯一の**真の**宗教であることを証明しようとしている。「私の主人は神の最大の化身、あるいは唯一の啓発された主人である」と言う人は、紛れもなく無知である。十分に啓発された精神的指導者を判断する基準は、十分に啓発された弟子たちに委ねられる。啓発された弟子たちは、啓発の道を示した自分の主人、教師や教祖に完全に忠誠を尽くすが、その人は常に他の神の化身や主人を尊重する。[1]

「[宗教について] 多くの異なった定義が、長年にわたって西洋で形成されてきたので、部分的なリストですら非実用的だといえよう。」『Encyclopedia of Religion (宗教の百科事典)』 (Mircea Eliade, Macmillan, London/New York: 1986, p. 283)。よって私は、いくつかの宗教的体験の特徴および宗教にある文化的かつ社会的に**深く**根づいた知識というものに満足しなくてはならない。

最も一般的な状況において、宗教は「精神」との関連性における人間の探求である。実際には統合、しばしば礼拝を含んだり、それに向かうことがある。

キリスト教徒にとって、これは「人間の堕落」前の段階に戻すことを指し、彼らは神の息子、イエス・キリストを通して可能だと信じている。つまり、宗教 (イエス) とは結合であり、神と人間との結合の象徴である。しかしながら、宗教の主な問題は、それぞれの宗教の神学者がそれを異なって見ることである。宗教は結合し、神学は分裂すると言える。しかし、神学は、宗教およびさまざまな宗教を理解するために必要である。

ルドルフ・オットー (1869–1937年) は、『Das Heilige (聖なるもの)』という著書の中で、宗教の覚醒の本質を、神を前にした畏敬の念、恐怖と魅惑との独特の融合と定義する。彼はインドやモロッコ、そ

して自国ドイツでの多くの経験を引き合いに出し、人間、すべての人間は時々、「全く別のものがあること」を受け入れると結論付ける。

ミルチャ・エリアーデ (1907–86年) は、神に関する知識は経験に限定されないことを追加。それは世界中での象徴主義と儀式において例証される。象徴や儀式、そして経験は、結果として人間がそのように行動する理由を探究することになる。象徴や儀式は、神話学に根ざしている。

心についてこれらの定義とともに、私は宗教の主な特徴についてふたつの代表的な主張を用いる。ひとつは、レイナー・フラッシェ (マールブルク) 博士の『Acta Comparanda II』 (Antwerp 1987年) 27ページでこのように述べている。「私たちが**新**宗教と見なすには、ある宗教運動が**新しい**教義、**新しい**カルトを中心にして、これらふたつの要因を通じて**新しい**地域社会が設置されたことを意味する。」

ふたつ目の主張や定義は、ヘルンフッター宗教のW. ルトジェハルム博士 (ブリュッセル) によるもので、ツィンツェンドルフ伯爵と神霊に関する研究は、すべての宗教は進化の産物であると証明する (Brusselse Theologische Studies, Number 1, 1976, p.6)。グループの人々が共通の経験と感謝のために集う時、宗教がある。このグループが、この行為を習慣として使う時、私たちは具体的な宗教「宗教施設」について話すことができる。先導する誰かが責任者になり、人々に自分と同じように振舞うべきだと告げると、それが宗派やセクトとなる。もし誰かがそれを別のやり方で行いたい場合、その人が新しいセクトを始めることができる。こうして、誰もが「畏敬の念を抱く」存在を崇拝する。

そこで私たちは、ある宗教において、霊的なものと超越的なものとのつながりや統合を見出すことが期待できる。象徴や儀式、経験と同じく、教義や実践は、この超越的な領域と関連する。そしてある地域社会はそのような信条や実践を中心に展開される。

II. サイエントロジーの観察

サイエントロジーを調べた時、他の多くの宗教と共通の性質があることを観察した。例えば、クリスチャン・サイエンス (1879年にメアリー・ベーカー・エディによって設立)[2]。キリスト友会、通称：クエーカー (1665年にジョージ・フォックスによって設立)[3]。新エルサレム教会 (1780年代にE. スウェーデンボリ [1688-1772年] の哲学を基に設立)[4]。アントワーニズム (1910年にペレ・アントワーヌによって設立)[5]。そして、哲学そのもの、仏教のいくつかの側面。

これはシンクレティズムでも、単なる運命でもない。サイエントロジーは、ひとつの心 (L. ロン ハバード) から始まり、人々が自身の宗教、宗派、カルト、セクトの内に崇拝の新しい形態を探し求めていた時に開発された。(語源学的に、セクトという言葉はラテン語sequi「従うもの」と関連付けることができる。) サイエントロジーのメッセージは、キリスト教やユダヤ教、イスラム教でもなく、古くから

のルーツを持つ。それはヴェーダから始まり、ハバードは知恵を隔離して、系統化しようとする西洋の神学／哲学よりも多くの知恵を見付ける。[6]

それは他の宗教と共通の特徴を持っている一方、サイエントロジー自体は独特で、L. ロン ハバードの作品に基づく独自の広範な教義、そして独自の宗教的実践がある。

サイエントロジーは「野蛮な」西洋で創設され、[7]そこで「Golem (ロボットのような存在)」が「主人」になったので、[8]それが現代における精神的なメッセージを求めている人々の心の扉を開く。

III. 教義

L. ロン ハバードは『ダイアネティックス：心の健康のための現代科学』という本を書いた時、解除反応療法 (abreaction therapy) を始めたが、私の知る限り、彼は教会や信条が宗教というものになるとは考えていなかった。その時点における彼の唯一の狙いは、心を扱うプロセスを利用して、いかに人々を助けるか、という問題であった。つまり、彼は精神分析医の治療に疑問を持っていたのである。[9]そこで彼は人々を助け、より有能にすることができる別のシステムを探し、1950年に初めて出版された基本の教科書『ダイアネティックス』の中でそれを説明した。

ハバードはさらなる調査を行うにつれ、人が単なる身体や心ではないことを発見した。実際には、人は「セイタン」と呼ばれる不滅の精神的存在である。セイタンは、その人自身であり、その人の身体や心、その他のものでもない。それは、人が**持っている**ものではなく、その人**そのもの**である。このセイタンは、無数の過去の生涯を生き、現在の身体の死を超越する。サイエントロジーにおける前世の概念は、仏教における因果の構造 (samskara) と比較することができる。[10]

サイエントロジーの教義によれば、セイタンは反応心の中に保管される、現世と前世における外傷的経験という重荷を背負わされてきた。これらの経験は、彼に痛みを感じさせたり、不合理な行いをさせ続けることがあり、完全な精神的意識と能力を妨げるものである。サイエントロジーは、「オーディティング」という実践を通じて、このような過去の精神的外傷を扱い、セイタンがこれらの過去の経験を打ち明けることによって、より精神的な存在として自分自身を認識するようになる。そこで、自分は誰なのか？ なぜ自分なのか？ というような問いに対する答えを見付ける。人はオーディティングを通じてより高い精神的意識に達するにつれ、存在のすべての面に関してより完全で、倫理的な人生を送ることを学ぶことができる。それをサイエントロジーでは8つのダイナミックスと呼ぶ。人は8つのダイナミックスにおいて存在し、生存を求めようとする。それは以下のように説明されている。

第1のダイナミック：個人として生存しようとする衝動。

第2のダイナミック：セックスと家族を通じて生存しようとする衝動。

第3のダイナミック：グループとしての生存。これにはその人の仕事や学校、クラブなどすべてのグループが含まれる。

第4のダイナミック：全人類のために生存しようとする衝動。

第5のダイナミック：植物や動物など、すべての生命体のために生存しようとする衝動。

第6のダイナミック：物質、エネルギー、空間、時間を含む、物質宇宙の生存の衝動。

第7のダイナミック：精神として、精神的な次元で生存しようとする衝動。

第8のダイナミック：無限や、至高の存在として生存しようとする衝動。

これらのダイナミックスは、それぞれ高いダイナミックがそれより下のものを包含する同心円として考えることができる。**オーディティング** (サイエントロジーの主要な実践である個別の精神的カウンセリング) は、すべてのダイナミックスを扱い、精神的な次元や神との関係を含め、それらすべてに関する人の意識と責任感を高める。

至高の存在や神のダイナミックの概念は、サイエントロジーの教義の中に頻出する。サイエントロジーには、至高の存在の形態に関する特定の教義はないが、その宗教的な教えでは、創造神がすべての存在の極みとする神の存在と役割が見られる。例えば「サイエントロジー教会の信条」にはこうある。

この教会の私たちは信じます。

すべての人間は、いかなる民族、肌の色、信条であろうと、平等な権利を与えられて創造されたこと、

すべての人間は、自分自身の宗教的な実践および執行に関する、侵すべからざる権利を持っていること、

すべての人間は、自分自身の生命に関する、侵すべからざる権利を持っていること、

すべての人間は、自分の正気に関する、侵すべからざる権利を持っていること、

すべての人間は、自分自身の防衛に関する、侵すべからざる権利を持っていること、

すべての人間は、自分自身の組織、教会、政府を創造したり、選択したり、援助したり、支持したりすることに関する、侵すべからざる権利を持っていること、

すべての人間は、自由に考えること、自由に話すこと、自由に自分自身の意見を書くこと、そして他の人々の意見について反論し、発言し、あるいは書くことに関する、侵すべからざる権利を持っていること、

すべての人間は、自分自身の種の創造に関する、侵すべからざる権利を持っていること、

人間の魂が人間の権利を持っていること、

心の研究および精神的に引き起こされた問題の治癒が、宗教から引き離されたり、非宗教的分野で黙認されるべきではないこと、

そして、神にまで至らないいかなる力も、あからさまにせよ、ひそかにせよ、これらの権利を保留したり、顧みない権限を持っていないこと。

そして、この教会の私たちは信じます。

人間は本来善であること、

人間は生存を求めていること、

人間の生存は、自分自身に依存し、自分の仲間に依存し、そして人間がこの宇宙との人類愛を達成することに依存していること。

そして、この教会の私たちは、神の法が人間に次のことを禁じると信じます。

人間自身の種を破壊すること、

他の人の正気を破壊すること、

他の人の魂を破壊したり奴隷化すること、

自分の友や自分のグループの生存を破壊したり、減ずること。

そして、この教会の私たちは信じます。

精神が救われ得ること、

そして精神のみが身体を救い、あるいは治すことができることを。

オーディティングに加え、サイエントロジストは、L. ロン ハバードの著作の勉強や録音講演を聞くことで啓発を求めるが、その数は膨大である。この勉強は「トレーニング」と呼ばれ、オーディティングに加えてサイエントロジーのもう一方の重要な宗教的実践である。

サイエントロジーには、ピュアリフィケーション・プログラムもある。それは運動、ビタミン、サウナの組み合わせを利用して、精神的な進歩を妨げる薬物、化学物質、他の不純物を身体から排出する。これは「バランスの取れた生活」を送ること (キリスト末日聖徒やモルモン教の教会の基調) であり、それは人が8番目の「神のダイナミック」という最高のダイナミックに達するのを助ける。[11]

サイエントロジーの聖職者も、サイエントロジー独自の儀式や象徴主義を使って、結婚、葬儀、洗礼、聖職者カウンセリングを行う。

サイエントロジーは、教義について他のほとんどの宗教と同じ見解を持っている。それは人々に客観的な事実を示している。[12]しかし、永遠に固定されているローマ・カトリック教会のようには「教義」という言葉を使わない (バチカン公会議、1870年) 。

ハバードはそれを第一の原則として、知恵はそれを得たいと思っている人のためにあると宣言した。第二の原則は、知恵は適用できなくてはならないということ、第三の原則は、それが真実であるかは、効果をもたらして初めて、価値があるということである。L. ロン ハバードは次のように述べている。「サイエントロジーは効果がある限りうまくいくだろう。」[13]

IV. 結論

宗教歴史学、社会学や比較宗教学の分野の学者にとって、サイエントロジーが宗教であるのは間違いない。

オーディティングとL. ロン ハバードの著作の勉強を通じて、人は自分の精神的な意識を高め、第7のダイナミック (精神的な次元) と第8のダイナミック (至高の存在) を含む、すべてのダイナミックスに一致するように努力する。それは独自の教義と実践を兼ね備えた宗教運動であり、その宗教的信条を軸にコミュニティーが確立された。サイエントロジーには独自の儀式や象徴主義があり、創設者であるL. ロン ハバードの発見と洞察力に基づいている。

サイエントロジーは、他の宗教といくつかの特徴を共有しているが、信者のために精神や神と結び付く独自の道がある。

クリスティアン・フォンク
アントワープ、1996年

注釈

1. “Truth vs.Small-minded Religious Dogma” in “Self-Realization,” U.S.A., Winter 1995, Vol.67, No. 1. p.32。

2. クリスチャン・サイエンスは、精神療法についての質問から始まり、サイエントロジーと同じような状況下で設立された。メアリー・ベーカー・エディの主な信条は、神は心と精神であり、人は善である。人は善であるので、人の仕事 (創造物) も善である。つまり、物質、罪、病気、死は、実際には存在しない。これを受け入れる人は、教え導かれる。イエス・キリストの教えに従って生きる人は、身体的および精神的に健全な生活を送ることができる。

3. メンバーシップ、結婚やその他の手続きは、キリスト友会 (クエーカー) と同様に礼拝の決まったやり方がないが、文化的環境に応じて決まったパターンの例がある。London Yearly Meeting of the Religious Society of Friends の「Church Government (教会運営)」を参照。(Friends Book Centre, London 1968.)

4. サイエントロジーにおけるハバードの著作と似た、E.スウェーデンボルグの作品は神聖なもの (啓示体験) であり、著者によって設定されたステップに従って、信者によって使用される。翻訳書が使われるが、基本原則に対して、人はオリジナルの言語に戻るべきである。辞書類がこれらのセンターの至る所で見られる。オランダのデン・ハーグの新エルサレム教会などでは、朗読がラテン語のオリジナルのテキスト (スウェーデンボルグはラテン語で著述) で行われ、聖職者ができるだけ詳しく解説する。ラテン語で読める聖職者のみが叙任される。ロン ハバードのオリジナルの文書は、同様に丁重に扱われる。(『The Religion of Scientology (サイエントロジーという宗教)』1994年、p.5)

5. (ペレ) ルイ・ジョセフ・アントワーヌ (1845-1912年) は、ベルギーの鉱山労働者であったが、アラン・カルデックによって書かれた『Livre des Esprits (霊の書)』という本を読み、数多くの「寺院」と呼ばれる教会 (ベルギー、ドイツ、フランス、ポーランド、アフリカ諸国、南アメリカ) を設立、そこで癒しの儀式が行われた。彼はキリスト教徒ではなかったが、 構造的な神智学者 (「新しい心霊術」の創設者と自称) として、彼はすべての形態、特に東洋の宗教教義を公開した。彼の教え:「すべての物は錯覚です。悪はそれ自体では存在しません。私たちの想像力の産物です。幸福とは、変化し錯覚を起こす物の形態を目にすることでもたらされる欲求すべてを取り除いた状態です。生まれ変わりから生まれ変わりへ、いつの日か私たちの精神が解放される時か来るでしょう。」『The Dictionary of Religions (宗教辞典)』 (University Press of France) は、この宗教を原始仏教のようなものと呼ぶ。病気に対する精神的な癒しによって、彼は1901年と1907年に裁判所に起訴され (聖職者と法務の医療当局が彼を告訴した)、骨の折れる論争の後、無実が

立証された。ほぼ同じことがメアリー・ベーカー・エディ、ジョージ・フォックスとエマニュエル・スウェーデンボルグに起こった。サイエントロジーはいくつかの地域で似たような迫害を受けた。

6. 「The tradition of barbarism (野蛮性の伝統)」、「フェニックス講演」p.33。(Publications Organization World Wide, 1968年。)

7. Rabbi A.Malinsky concerning "the progress of technical science and the decline of man" in "Acta Comparanda II," Antwerp 1987年, p.7。

8. 「フェニックス講演」p.33。

9. 精神分析において、例えば、分析者はその人が言うことを受け入れないが、それを解釈し、自分なりに状態の評価を行う。これはサイエントロジーのオーディティングの正反対であり、オーディター(auditor:「聴く人」ラテン語のaudireに由来する)が、個人のために評価することを明確に禁じている。その人は自分**自身で**答えを見付ける。(『**サイエントロジーとは何ですか?**』Bridge Publications、1992年 p.163。)

10. 『Have You Lived Before This Life? (あなたは前世に生きていましたか?)』「karma **(カルマ)」という用語の本来の意味は**、単に「行為」を意味し、それは因果の理論と関係があり、一般には過去に行われたあらゆる行為の結果として得た、一種の潜在的な力と見なされるようになる。それは、すべての過去の行為の結果が良いか悪いか、苦しみか喜びかは、その行為によるが、それは未来に影響を与える力があり、これが人のカルマとして見なされる。良い行為が繰り返されるなら、善が積み重ねられると信じられ、その潜在的な力は未来に有益な影響として働くだろう。(参照文献:『ブッダの教え』 仏教伝道協会、東京、1966年、p.300)。

11. 「フェニックス講演」p.315。

12. サイエントロジーの中で最も重要な客観的な事実(「教義」)は『ダイアネティックス』に始まるハバードの著作である。これらは生徒自身が直面することで解決することになっており、オーディターや監督者の役割は、教会員を助けることだけである。

13. 『The Church of Scientology (サイエントロジー教会) 』p.2。

著者について

教育

Marnixschool (Antwerp)
K.Atheneum (Antwerp)
Landbouwschool (Agriculture in Stabroek)
Institut Biblique Européen, Paris, France (1957–60年)
Linguistics (S.I.L. in cooperation with University of London.1959年)
Seminario Teologica Baptista, Lisbon, Portugal (1960–61年)

叙任

United Protestant Church in Belgium (Genk, 1979年)
Southern Baptist Convention (Phoenix, Arizona USA, 1980年)
Protestantse Theologische Faculteit, Brussels, Belgium (1969–70年)
Southern University, USA.Ph.D. thesis, "The Philosophy of Inmates based on the Theology of K.Barth & R.Otto" (1977年)
Parthasarathy C.Academy, India: Honorary Ph.D.(1985年)

役職

Assistant Chaplain (C.I.B.I.) in the Belgian Army in Germany (1962–63年)
Teacher of Protestant Religion, State Schools (1963–65年)
Editor/Founder of the fortnightly magazine "Op Vrije Voeten" (1962–79年)
Director/Founder of Op Vrije Voeten Youth Service (1963–79年)
Founder/Administrator of the Independent Federation for Youth Services (1978年迄)
Member of the Commission and Council in the Ministry of National Education and Culture (1978年迄)
Founder and Chairman of the Belgian Surinam Committee (1975–92年)
Administrator of the Flemish-Periodical Press Association (1967–83年)
National Director of the International Christian Youth Exchange (1971–76年)
National Correspondent of Ecumenical Youth Council Europe (1975–77年)
Youth-minister of the Gospel Missionary Union (Zeist) for Belgium 1970年迄
National Director of Youth for Christ (1963–79年)
Treasurer of the YFC-International Europe (1967–70年)
Chaplain of the Prison System (1976–82)
Chaplain of Migrant Workers (1980–85年)
Member of the General Assembly of the Schola Para Medicorum (1982–89年)
Member of the U.P.C.B.(Brasschaat)

Member of the General Assembly of the Faculty for Comparative Study of Religions (1980年–)
Rector of the Faculty for Comparative Study of Religions (1980年–)
Professor of Philosophical Theology (1985年–)
Member of Foundation "Craeybeckx, Detiège, Grootjans," University of Antwerp (1995年–)
Administrator of the World Congress of Faiths (1974年–)
Administrator of the Friends of the Ethnographical Museum in Antwerp (1979年–)
Member of the Ecumenical Workshop for Information in Europe (1974年–)
Member of W.C.R.P.Belgium (1989年–)
Advisor to the Commission Christianity-Islam of the U.P.C.B.(1981年–)
Member of Baptists Ministers' Fellowship (1979年–)
Administrator of the Patronizing Committee —Jurisdiction of Antwerp (1982年–)
Editor of "Acta Comparanda," (1983年–)
Reporter of "Kerk en Leven," (1974年–)
Pastor of the Multi-Lingual Baptist Church, Antwerp (1983年–)
Member of the Antwerp Philosophical Association Werkgroep Kierkegaard (1990年–)